

「フリーコーヒー」実践報告

—田中元子実践をもとにして—

大西 正泰

A Practical Report on 'Free Coffee'

—Based on the Practice of Motoko Tanaka

Masahiro OHNISHI

Abstract

Based on the practices of Motoko Tanaka, a leading figure in free coffee, we extracted the conditions for implementing free coffee and carried it out both inside and outside the university campus. In addition, for comparison of practices, we conducted it in seminars and classes with many people, and conducted surveys and interviews with implementers, as well as participant observation. As a result, we found that certain conditions are necessary to generate “My Public (My public space)” by implementing free coffee.

Key words : Free Coffee, My public(My public space), Community

キーワード : フリーコーヒー, マイパブリック, コミュニティ

1. はじめに

2000年代に入り, 経済及びコミュニティ形成の視点から, 「フリー」がキーワードとして散見されるようになった。身近な現象で言えば, 主なサービスが無料で使えるフリーミアム (より機能的な追加サービスは有料となるビジネスモデル) である¹⁾。昨今では, 多くの人々が無料で利用できることでコミュニティが形成されるフェイスブックなどのSNSのみならず, ゲームアプリの多くもフリーミアムのスタイルで提供され

ている。こういった「フリー」の現象は, 無料にすることで“貨幣による関係性を解放”し, 経済とコミュニティ生成を組み合わせるものとして認知されるようになってきた。

このような背景の中で, コミュニティ生成に効果的だとされるフリーコーヒーというふるまいが日本で誕生し, ネット上でその実践が散見されるようになった²⁾。このフリーコーヒーとは, 屋台で無料のコーヒーをふるまうことで, 貨幣による関係性を解放し, コーヒーをふるまう側が作る私的なコミュニティ (公共空間)

が立ち上がってくるワークショップとして認知されつつある。

本稿では、公共空間づくりを体感できるワークショップとして認知されてきたフリーコーヒーを追試した実践報告である。追試とは、教育学のアプローチで、他者の実践を異なる場所や異なる対象者を相手に、同じように実践し、その過程で、再現性の有無や違いを検討することである。フリーコーヒーの追試にあたって、2014年から実践され、フリーコーヒーについての著作もある田中元子（2017）の実践をもとにする³⁾。2023年2月から2023年12月までの約1年間吉備国際大学でフリーコーヒーを行ってきた。なぜ、無料のコーヒーをふるまえば、公共空間づくりができるのか。ふるまう人やふるまわれた人にどのような変化があるのか。実践報告について、ふるまう側については、10回以上フリーコーヒーを実践した大学生へのインタビューや、筆者のゼミや授業で実施したものと比較検証を行い、どのような変化が見られたか報告する。また、フリーコーヒーの屋台を通じて、どのような現象が起きたのか、全26回の実践について参与観察を行ってきた結果をもとに報告する。

2. フリーコーヒーについて

先行実践からみるフリーコーヒーの特徴を抽出してみる。フリーコーヒーの起源については、誰が始めたのかよくわかっていない。日本及び海外文献を調べても出てこない。2014年と最も早くから取り組み、フリーコーヒーの名前で実践していた田中（2022）は、その起源について、「フリーコーヒーという単語自体、英語で書いてもカタカナで書いても、わたしが思いつきでやり始めた2014年当時、インターネット上の情報はほぼ皆無でした。（中略）同時多発的に同じようなことを思いついたひとが国内外の各地にいたのではないか」と書いている⁴⁾。

今回の追試では、フリーコーヒーの実践者である田

中（2017）をベースに、「フリーコーヒー」を明らかにする。

田中は、フリーコーヒーを自分が幸せになる事ができる「趣味」として位置付ける。その三原則として、「1. 自分を満たす趣味、2. 他者と楽しむ、交流する趣味、3. 社会や世の中に貢献できる・役に立てる趣味」とする⁵⁾。つまり、フリーコーヒーは、“無料でコーヒーをふるまうことで、他者と交流を楽しみ、社会や世の中に貢献できて自分が幸せに感じる行為”と定義づける事ができる。

さらに、田中は「第三者」と「期待しない」を重要なキーワードとする⁶⁾。田中は、ふるまう相手が不特定の第三者であり、貨幣を通じた交換（売る方も買う方もそれぞれ期待通りのものを貨幣によって交換する）でもなく、友情を通じた交換（友人であるから故の期待が生じる）でもない第三者との交流を重要視する。そして、第三者との交流は、「何が起きるか、誰が来るかわからない、予測不可能な状況に自分を置くことができる」ゆえに、「敗北も失敗もない、やればやるだけ、ただ楽しい気持ちでいられる」と、“第三者との互いに「期待しない」コミュニケーションの効用”があることを指摘する⁷⁾。

3つめに、フリーコーヒーがコミュニケーションの媒介となるためのアイテムとして「パーソナル屋台」を取り上げる。「自分が近寄って見てもよい何か」が屋台であり、加えて、第三者に認識してもらえらるための、パーソナルなその人らしさの出た「何か屋台のようなもの」であれば良いとしている⁸⁾。

4つめに、“屋台の出店場所”についてである。田中は、「まちは完全に完成された場所ではない」とし、補完するものが必要だと考えている。その例として、公開空地や「歩道のデッドスペースや使われていない駐車場、終バス（ママ 筆者注）が終わった後のバス停、河原の遊歩道。」といった「都市空間の中にできた、小さなヴォイド（空白）」⁹⁾をとりあげている。つまり、田中は「都市のヴォイドに必要なものは、無意味

に植え込まれたツツジでもなければ、自動販売機でもない。そこには、ひと気が必要だ¹⁰⁾と考へ、「ひと気を作る行為」（ここではフリーコーヒーが該当する）によって、まちは完成に近づくと考へていることになる。そういったことから考へると、フリーコーヒーは人が多く集まる場所ではなく、ひと気の少ない「小さな空白」や、ひと気ができることでまちの「それぞれの表情や性格が表れる」場所が、屋台の出店場所としてふさわしい立地になる¹¹⁾。

5つめに、田中は、埼玉県のおふろカフェの事例をもとに、フリーコーヒーがもたらすのは「自分が自分のままでそこにいてもいいという、そしてその状態を他人と許容しあうという、ゆるくてやさしい居心地」¹²⁾の空間だとしている。つまり誰もが無料のコーヒーを待ち、飲む間は“ただ、そこにいること”が許され、人間関係の上下が必要とされない、フラットな状態を条件とする。

6つめに、フリーコーヒーによる結果としての社会貢献は、ふるまう側にとって“交換行為でない”ことである。田中は、「わたしがイメージしていた社会貢献のかたちとは、ちょうど、何かを与えたら何かを受け取るのが当然という、対価と同じようなかたち」とし、交換行為に見えていたとする。また、「ふるまうというわたしの楽しみが、少しでも、社会にとって貢献的な存在ともなり得たらいいな」¹³⁾とも説明している。つまり、ふるまう側にとっての動機は“私的な喜び”が主作用であり、社会貢献につながるのは副作用になる。フリーコーヒーそれ自身は、コーヒーを媒介としたコミュニケーション行為が目的であるので、イベントで賑わいづくりのためにやって欲しい（フリーコーヒーの目的を副作用である賑わいにする）というのは、その本質として主・副作用の逆転につながる。このことが7つめの指摘につながる。

7つめに、フリーコーヒーの「能動性」についてである。田中は、情報に溢れた現代社会では、自らの能動の発露さえも、みんなが選んでいるものの中から選

ぶという意味で受動的能動に陥っており、能動性を発揮する機会（田中は能動機会と呼び、奪われた能動性を受動機会と呼ぶ）を奪われ、能動機会の皮を被った「受動機会」に飽きているとする¹⁴⁾。それゆえに、「ひとは趣味の中で、能動性を発揮させている。わたしはその能動性を、もっと社会で、つまりまちの中で直接的に存在させたら、どんなに素敵だろう」と考へ、フリーコーヒーに見られる“能動性の発露”がまちづくりの行為として必要であり、まちを魅力的な場に変えると見ている¹⁵⁾。当然ながら、ふるまわれる側も、屋台に来るのは自由なので、双方の能動性によって成り立つ行為にもなる。

8つめに「富の再分配」と「与え合いを目指さない」点である。田中は、フリーコーヒーを自らの富の再分配行為とみなしている。「わたしは数十円を、一杯のコーヒーに替えて再分配している。同時にわたしは、わたしが欲しいと思っている、ちいさなコミュニケーションをひとつ、得ている。そこで富の循環は、すでに完結しているのだ。したいかたちで再分配して、しかも欲しいものを得て完結する。こんな快感は他にない。」¹⁶⁾と述べる。さらに、田中は上述の「完結する」点について、ギフト経済と比較する。フリーコーヒーでは、ふるまう・ふるまわれる贈与行為が相互に推奨されるギフト経済とは異なり、未来で返報されるべき何かしらのふるまいを要求も期待もしない。交換行為ではなく、ふるまう側の中で循環される私的行為（自己内循環による非交換行為）とフリーコーヒーをみなしている。そのため、受動機会から逃れられ、純粋な能動性が得られることで、「ふるまいとは、生きるうえでの主導権をうまく握れる手段」となる¹⁷⁾。こういった観点で生まれるのが、田中の言う「マイパブリック」（自分で作る公共）である。

田中は、これらを元に、ワークショップで開催するにあたって、パーソナル屋台での出店に必要なルールを3つにまとめた¹⁸⁾。

- 1) まちの「隙間」です。
- 2) 自分のやりたいことをする。
- 3) 無料です。

田中の行ったワークショップでは、ルール2の中身をコーヒーから自由に入れ替え、たくさんのパーソナル屋台の事例が紹介されている。例えば、ビネガードリンク、おもちゃ、チャイ、花、カレーなど、さまざまなものが紹介されている。

追試にあたっては、上述のルールをベースに、フリーコーヒーの追試を行った。

3. フリーコーヒーの実践報告

3-1 フリーコーヒー実施概要

フリーコーヒーの実践は、吉備国際大学高梁キャンパス・南あわじキャンパス、高梁市内の各地で行われた(表1)。

2023年2月から2023年12月まで約1年間実施したのをまとめたのが表2である。

実施全回数は26回(オープンキャンパスでの実施6回を含む)。19回は、フリーコーヒーに能動的に参加するメンバーでの実施。ゼミで5回、2つの異なる授業2回。そして、キャンパス外では9回実施した。

表1 フリーコーヒーの実施場所

場所	場所の特徴
吉備国際大学高梁キャンパス (6号館事務所前) 高梁市伊賀町8	高梁キャンパス6号館1階事務所(庶務課など)前で、玄関口。授業の移動時間に通行するぐらいで人通りの少ない場所。
吉備国際大学高梁キャンパス (アジア村周辺) 高梁市伊賀町8	高梁キャンパスアジア村(留学生の休憩場所)周辺。留学生たちが授業の合間に休憩する場所。
吉備国際大学 南あわじ志知キャンパス (エントランス棟玄関) 南あわじ市志知佐尾370-1	南あわじ志知キャンパスの大学祭に合わせて出店。正門から入ってすぐのエントランス棟で、大学祭の受付があり、多くの人が受付を済ませて移動する場所。当日はたくさん人が訪れた。
高梁市商屋資料館池上邸 高梁市本町94	無料観光休憩所として解放されている醤油蔵のある立派な屋敷。トイレ休憩などに使われているが、平日は閑散としている。
エスカショッピングデパート 高梁市栄町1904	栄町商店街の一角にある、かつて映画館やスーパーマーケットがあった空きビル。旧エスカが通称。
高梁市役所 高梁市松原通2043	岡山県高梁市の市役所。市役所の1階にテラス席があり、そこでフリーコーヒーを実施。平素はほとんど使われてない。
雲海展望台 高梁市松山	雲海に浮かぶ備中松山城を望む展望台で、松山城から最も近い展望台。雲海が見られる時に観光客が訪れる場所。

表2 フリーコーヒー実施日一覧(2023年実施分)

NO	日付	実施者	ゼミ	授業	場所	
					大学	大学外
1	2月1日	1			高梁C	
2	2月10日	2			高梁C	
3	4月19日	8	8		高梁C	
4	4月25日	3			高梁C	
5	4月26日	8	8		高梁C	
6	5月16日	2				池上邸(高梁市)
7	5月17日	5	5		高梁C	
8	5月21日	2			高梁C	
9	5月24日	5	5		高梁C	
10	6月7日	13	13		高梁C	
11	6月18日	1			高梁C	
12	6月27日	2			高梁C	
13	7月16日	1			高梁C	
14	7月17日	17		17	高梁C	
15	8月6日	3			高梁C	
16	8月27日	1			高梁C	
17	8月30日	3				旧エスカ跡地(高梁市)
18	9月22日	3				高梁市役所
19	10月27日	4				高梁市役所
20	11月2日	41		41	高梁C	
21	11月12日	1			高梁C	
22	11月17日	8				高梁市役所
23	11月18日	2				南あわじC
24	12月8日	3				雲海展望台(高梁市)
25	12月15日	3				高梁市役所
26	12月17日	2				高梁市文化会館(高梁市)

* 高梁C = 吉備国際大学(高梁キャンパス)

* 南あわじC = 吉備国際大学(南あわじキャンパス)

以下、実施場所の様子である。



写真1 高梁C(6号館の様子・筆者撮影)



写真2 高梁C (アジア村の様子・筆者撮影)



写真5 旧エスカ (筆者撮影)



写真3 南あわじC (筆者撮影)



写真6 高梁市役所 (筆者撮影)



写真4 池上邸 (筆者撮影)



写真7 雲海展望台 (撮影Yamagata Mariko)

フリーコーヒー実施にあたって必要な備品類は以下のようになる¹⁹⁾。

表3 フリーコーヒーの基本セット（屋台1台分）

主な用具・機材など	個数	主な用具・機材など	個数
コーヒー豆	500g	スプーン	1個
ペーパードリッパセット	2個	お客様用木製スプーン	50個
ドリッパ用ペーパー	50枚	紙コップ	80個
湯沸かしケトル	1個	ゴミ箱	2個
卓上コンロ	1口	ゴミ袋	1セット
コンロ用三方囲い	1個	雑巾	2枚
消化器	1台	看板	2枚
コーヒー保温プレート	1台	看板用チョーク	1セット
コルクマット	2枚	給排水用タンク (20ℓ)	4個
計量カップ	1個	除菌アルコール	1個
ミルク入れカップ	1個	除菌シート	1個

3-2 追試の種類について

全26回の実践を整理すると、主に4つに大別された。

表4 追試の分類

	分類名	実施内容
パターン1	追試	田中実践と同じ、フリーコーヒーに興味あるメンバーが1人で屋台を運営する。
パターン2	比較1	筆者ゼミ生で実施。フリーコーヒーに理解ある4年生とフリーコーヒーへの理解が低い3年生でそれぞれ実施。能動性の高低差や人数でどのような違いが生じたか。
パターン3	比較2	筆者授業で実施。フリーコーヒーへの理解が低い中で実施した場合、どのような変化が生じたか。
パターン4	比較3	筆者授業で実施。フリー+αで能動性を高め、異なる目的（模擬起業）で実施。追試であっても、目的が異なるとどのような変化が起きるか。

パターン1（追試）では、田中実践と同じ条件で行い、パターン2（比較1）では、田中実践に変数を加えて、

- ①ふるまい手の能動性が低い場合はどうなるのか。
- ②ふるまう側の人数が増えた場合はどうなるのか。
- ③ふるまい手の能動性を高めるためにはどうすればいいのか。

フリーコーヒーについて学習経験のある筆者ゼミ所属の4年生と、新しく所属した3年生でそれぞれ実施し、かつ3,4年生合同で行ってみた。

パターン3と4では、パターン2を人数の多い授業

でも検証した。

3-3 実践の評価基準について

田中（2017）の述べるワークショップで追試する場合の3つの条件（無料・能動性・隙間）のうち、無料とまちの隙間での立地は前提条件となるので、残りの能動性を軸に評価基準を作成した。能動性の高低、コミュニケーションの種類（コーヒーを配る際の説明及び機能的な会話で終わるか、それ以外の雑談を含む会話が成立したか）、マイパブリックの種類（人がたくさん集まりにぎわいができたか、第三者同士でのコミュニケーションが生じたか）で評価基準を作った（今回ふるまわれた側の調査はできなかったため、ふるまう側だけを対象にした評価基準で実践を振り返ってみる）。

表5 実践の評価基準表

		ふるまう
1	ふるまい手に能動性があったか？	
2	コミュニケーションができたか？	
3	第三者同士でのコミュニケーションはあったか？	
4	マイパブリックの生成はあったか？	
5	にぎわいはできたか？	

評価基準について説明する。まずは、ふるまい手の能動性についてである。ふるまい手の能動性については、フリーコーヒー発案及び実践者である田中（2017）と同じ能動性は最初から期待できない。よって、フリーコーヒーの趣旨を理解し、興味を持って参加することで、能動性があると評価した。また、実践回数が増えるにつれて、ふるまい手の能動性がどのように変化したのかについてあとで詳述する。

次に、“ふるまう—ふるまわれる”間でのコミュニケーションの質である。フリーコーヒーで最初に必要とされるコミュニケーションは、コーヒーの説明や受け渡し時の会話である（図1）。

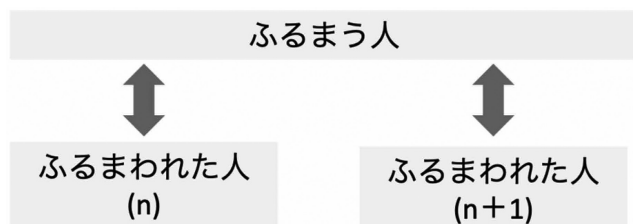


図1 “ふるまうーふるまわれる”のコミュニケーション

このコミュニケーションは、飲料店などでも見られる機能的会話であり、 n 人、 $n+1$ 人とどんどん増えていっても、そこには田中の言うマイパブリックは成立しない。となると、第三者同士を含めた、図2のような会話の生起が必要となる。

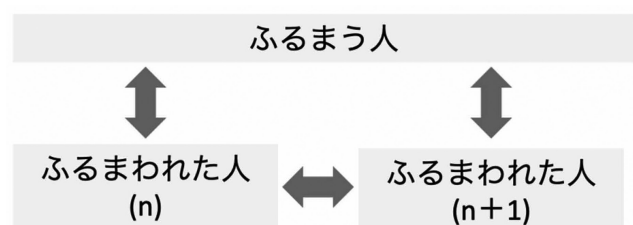


図2 マイパブリック生成のイメージ（最小単位）

これらの条件を満たし、にぎわいが起きたのか。これらが評価基準となる。ただし、にぎわいについては、例えばイベントでの無料試飲コーナーでもにぎわいができるように、にぎわいそれ自体の有無では評価できない。マイパブリックの生起があって、にぎわいが起きていく流れであることが評価対象となる。それでは表5の評価基準をもとに、実践報告を行う。

3-4 実践報告（パターン1）について

パターン1実践は、田中（2017）と同一条件で行った。ふるまい手は、初期から参加してくれている本学科学生（2年生・10回以上参加）2名（学生A、Bとする）やフリーコーヒーの趣旨を理解した筆者ゼミ生3名（3年生2名、4年生1名）を含む5名で行った。

初回の高梁キャンパス（表2初回No1）から、マイパブリックが生起してくる象徴的なシーンが見られた。



写真8 高梁キャンパス
（表2 初回のNo1実践 筆者撮影）

写真8を見ると、屋台でコーヒーをいれているふるまい手（本学科2年生）。手前左に座っている別学科学生（1年生）。屋台前では、異なる所属の本学教職員で、第三者同士の会話が見られた。1時間近く滞在した別学科学生にヒアリングしたところ、コーヒーが好きで立ち寄ったが、しゃべったことのない第三者との話が面白くて長居したと話をしてくれた。

次に、初めてキャンパス外で行われた池上邸（表2 No6）でも、同様の光景が、第三者同士である地域住民と地元高校生との間で見られた。

会話では、地域住民は同じ高校の卒業生ということもあり、異年齢であっても、楽しい会話が20分ほど行われた。またこの雰囲気によって多くのかたに楽しんでもらえた。



写真9 池上邸（表2 No6実践 筆者撮影）

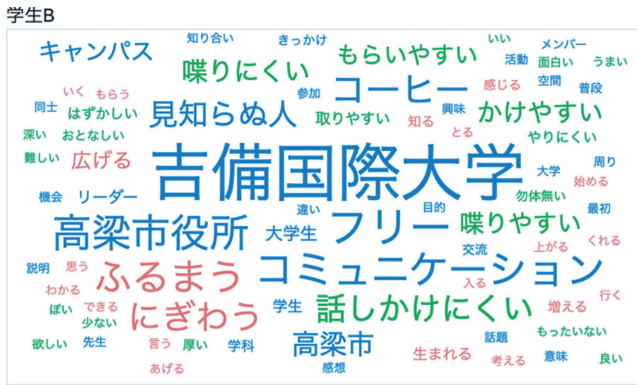


図4 ワードクラウドによる頻出単語 (学生B)

13回の参与観察とインタビューをもとに、評価すると、ふるまい手の能動性は初期からゆっくり高まって行動変容が起きている。コミュニケーションについても、第三者とのコミュニケーションを通じて、高まったことがわかる。フリーコーヒーをやる前と今のコミュニケーション力を比較して、学生Aは、現在を100とすると以前は10点だったといい、学生Bは大学に入る前は30点で、現在は80点と評価する。また、どの回でも初期からのべ50杯から200杯近く（平均して70杯前後）出ており、にぎわい創出にもつながってきた。これらの追試によって、フリーコーヒーには再現性があることが見えてきた。これらを実証基準に当てはめてみたのが表6である。

加えて、実践して改めてわかったのは、写真8や9にみられるように、ふるまい手のコミュニケーション

表6 パターン1 (追試) の評価

		ふるまう
1	ふるまい手に能動性があったか?	○
2	コミュニケーションができたか?	○
3	第三者同士でのコミュニケーションはあったか?	○
4	マイパブリックの生成はあったか?	○
5	にぎわいはできたか?	○

力に問わず、マイパブリックの生起が起ころうということである。また、参与観察していると、マイパブリックは、少人数の時に生起し、ふるまわれた側にコミュ

ニケーション力が高い、もしくは話すのが好きで、話をしたいと能動性を発揮している人が1人でもいるとさらに生起しやすいことがわかった。例えば、(表2 No18)の高梁市役所で初めて行った際には、会話が好きな市役所周辺の会社の方が来られて、第三者同士でも話が広がっていた(この方は、No25にも再訪してくれた)。

3-5 実践報告 (パターン2) の考察

筆者ゼミ生によるパターン2 (表2 No 3, 5, 7, 9の実践)の追試で見えてきたことは、ふるまう側の人数が増えると、マイパブリックの生起は起きにくくなることである。写真10は、フリーコーヒーへの馴染みが薄かった筆者ゼミ3年生で実施した時の様子である。

フリーコーヒーへの能動性が低い状態で、かつ屋台



写真10 高梁キャンパス (表2 No3実践 筆者撮影)

1台につき4-5人で行ったところ、コミュニケーションにムラができ、うまくいかなかった。写真10の屋台の前後にいるのは、ほとんどがゼミ生である。

次に、フリーコーヒーへの理解があり、イベントなどの経験が豊富でコミュニケーション力の高い4年生と合同で行った場合である(2グループに分かれて、表2 No9の実践)。どちらもイベントに長けた4年生に引っ張られ大盛況になった(写真2, 11)。ここで

わかったことは、経験豊富な4年生がお手本として存在することで、3年生に、フリーコーヒーのやり方が理解できたことである。ただ、参与観察をしていると、コーヒー担当者は、やはりふるまうだけに力が注がれ、ゆっくりとした会話ができていなかった。また、ふるまう側の人数が多くなると、コミュニケーション担当と、コーヒー担当に機能的に分かれてしまう。このことから、マイパブリックの生起は個人のコミュニケーションスキルに依存したものになった。



写真11 高梁キャンパス (表2No10実践 筆者撮影)

表7 パターン2 (ゼミ3・4年生合同実践の評価)

	ゼミ3・4年生合同実践	ふるまう
1	ふるまい手に能動性があったか?	△→○
2	コミュニケーションができたか?	△
3	第三者同士でのコミュニケーションはあったか?	△
4	マイパブリックの生成はあったか?	△
5	にぎわいはできたか?	○

3-6 実践報告 (パターン3, 4) の考察

パターン3と4は、授業での追試である。パターン3は(表2No14)で「ソーシャルデザイン論」(2023年春学期・選択授業・1年生以上・17名で実施)で取り上げ、フリーコーヒーを1回実施した。ヒアリングと授業後のアンケートをみると、やはり屋台での人数

が多くなると、機能的分化だけでなく、社会的手抜きが発生し、満足度にもばらつきがみられた。

パターン4(表2No20)は、「社会起業論」(2023年秋学期・選択授業・3年生以上・41名で実施)で、社会起業論の授業内容に基づき、模擬起業の文脈で行った。また、能動性を高めるために、フリーコーヒーのコーヒーにあたる部分aをチームで考えて実施するというものにした。(本学科は留学生が多いので、国別で7チームに分けて行った。)チャイ(スリランカ)、テレビゲーム(中国)、中国のお菓子(中国ほか)ボードゲーム(日本)、生春巻きと生姜茶(インドネシア)など行った。それぞれの国の特産や、好きなものをベースにしたので、大盛況で終わった(写真12)。



写真12 高梁キャンパス (表2No20実践 筆者撮影)

参加した学生の感想アンケートを見ると、フリー+ aで能動性が高まったが、ふるまうチーム内でのコミュニケーション・交流が楽しかったとするコメントが多く見受けられた。つまり、ふるまう側とのコミュニケーションは、知人友人に止まり、第三者同士のコミュニケーションは見る限り生起していなかった。マイパブリック生成の意識も、模擬起業という目的が変わったことで、より多くの人にサービス提供ができることが主眼となり、集客や顧客満足度の高い商品の選択などに目がいくことがわかった。3年生以上なので、フリーコーヒーについて理解も実践もしたことがあるが、感

想アンケートでは、1名だけ比較した学生以外、マイパブリックについての記述は登場していなかった。

表8 パターン3, 4 (授業の評価)

	2つの授業実践	ふるまう
1	ふるまい手に能動性があったか?	△→○
2	コミュニケーションができたか?	△
3	第三者同士でのコミュニケーションはあったか?	—
4	マイパブリックの生成はあったか?	△
5	にぎわいはできたか?	○

4. おわりに一実践を振り返って

全26回の実践を通じてわかったことは、田中実践と同じ条件(屋台1名)で実施した場合には、再現性が高いことがわかった。

しかし、ふるまう側の人数が増えると、機能的分化や社会的手抜きが生じ、にぎわいができたとしても、“マイパブリックの生起を起点としたにぎわい”につながっていないが見えてきた。

また、マイパブリックの生起についても、ふるまう側にしっかりとしたフリーコーヒーへの理解、能動性がなければ生起しにくいことがわかった。

加えて、ふるまい手の能動性が低い場合、フリーコーヒーへの理解とコミュニケーション力が高いふるまい手が入ることによって、能動性やコミュニケーションの改善がされた。しかし模擬起業として行くと、ふるまわれる側は市場とみなされ、同じような行為をしてもふるまい手に生じるような感情は生起しなかった。つまり、目的と行為が密接につながっているのが、フ

リーコーヒーであった。

さて、本稿に残された課題を4つ取り上げる。

1つは、ふるまう側に焦点を当てたので、次回ふるまわれる側の調査が必要である。ふるまう側同様に、どのような変化が起きているのか、調査をしたい。

2つめに、フリーコーヒーを繰り返していく中で、たびたび返報行為が見られた。率先して口コミを広げ第三者にまで声がけをしてくれる行為が毎回見られた。また差し入れをいただくことなど、友人知人でもない第三者からの「贈与」が散見された。これらの現象によって、贈与行為としてフリーコーヒーの原理解明の必要性が明確に見えてきた。

3つめに、マイパブリックの持続性である。イベントとして、実践を積み重ねるにあたって、このマイパブリック(第三者とのフラットな関係性)がいつまで持続するかという問題である。この点は筆者には2同様に荷が重すぎる課題であるが、マイパブリックの連続性の上に、公共空間への信頼や貨幣経済の中でも広がっていくのかなど、社会構成主義的なまちづくりとしてフリーコーヒーの実践を見た時に、どのような形で浸透していくのか、考えていく必要がある。このことは、結果的に、課題1のふるまう側で調べる内容にも回帰する。

そして4つめに、フリーコーヒーを主題とする論文はこれまで1件もなく(2024年1月8日現在)、まずは実践ありきで進めてきた。その中で、当事者研究的に、課題や研究仮説を生むための役割に徹したことから、研究が不十分な点は否めない。次稿では、フリーコーヒーについてさらに検討を加え、研究を進めていきたい。

引用文献・参考文献

- 1) クリス・アンダーソン『フリー』NHK出版、2016。でフリーミアムについて詳細が書かれている。
- 2) フリーコーヒーの実践について主なものを紹介する。(2024年1月8日現在)
 - ・ゼンガクジ・フリーコーヒー <https://zengakujifreecoffee.com/>
 - 2017年開設。東京都足立区古千谷本町にある「全學寺」を拠点にフリーコーヒーを開催されている。

・西川昌徳 <https://note.com/earthride/n/n1dc008a8a61d>

2018年開設。自転車旅の中でフリーコーヒーを実践。YouTubeやニュースにも報道されている。

そのほか、フリーコーヒーで検索すれば多くの事例が紹介されている。

3) 田中元子『マイパブリックとグランドレベル』晶文社。2017。

この本では、フリーコーヒーの実践に至るプロセスの様子が詳細に書かれている。2014年と最も早くから取り組まれており、事実上日本におけるフリーコーヒーの発案者で第一人者である。

4) 田中元子『一階革命』晶文社。2022。p10。

5) 田中 (2017) p57。

6) 田中 (2017) p57-58。

7) 田中 (2017) p58。この点は、サードプレイス論で常連の存在があることが居心地のいい条件として指摘されている点と異なる，“常連がいなくても成立する居心地の良さ”の指摘といえる。

8) 田中 (2017) p59。

9) 田中 (2017) p61。

10) 田中 (2017) p63。

11) 田中 (2017) p62-63。

12) 田中 (2017) p64-65。

13) 田中 (2017) p66。

14) 田中 (2017) p67。

15) 田中 (2017) p68。

16) 田中 (2017) p70。

17) 田中 (2017) p70-72。

18) 田中 (2017) p85。田中が実践した事例では、まちの隙間として、東中野駅脇の私道・隅田川沿い汐入公園・大手町ビル群の公開空き地などが紹介されている。

19) 屋台は2023年に一般企業から移動可能な組み立て式屋台を2台譲渡していただいた。2023年9月に、かつて専門学校で使われていた屋台2台を譲り受け、修復して合計4台となった。表3にまとめた備品の基本セットを買い物かご2つに入れ、屋台に積み込んで移動できるようになっている。キャンパス外は、組み立て式屋台を自動車で各場所に搬入している。

20) ユーザーローカル テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) による分析。